

Y Yokohama Art Site

Yokohama Art Site



特集

まちから世界を想像する

EduArt「SDGsquares」の様子

2023

vol.

037

特集

まちから世界を想像する



a.



b.

レポート1

EduArt

グローバルシティズンをアートを通して育む

SDGs を入り口に生命を見つめる

「生命はどこから来たか考えたことはありますか」。教室で小学生に語りかけるのはEduArtのふたり。SDGsを軸にしたアートプログラムを学校や保育園、そして地域で展開するアート教育団体だ。この学校で行ったのは「SDGsquares」というプログラムで1日目に対話型のレクチャー、2日目に廃材を利用した作品づくりを行う。レクチャーは担任の先生との打ち合わせを経て、そのクラスで取り組んでいる総合の授業に寄り添う内容で実施する。今回は6年間SDGsを軸に学びを深めてきたみなとみらい本町小学校6年生を対象に「地球レクチャー」を行った。地球上における命の誕生、人類が歴史の中で繰り返してきた成功と失敗

を時系列に追う内容だ。子どもたちは、地球環境や現代社会が抱える課題と未来へのつながりを考えた。レクチャーを終えてあらためて投げかけられた「生きるってなんだろう」の問いに、子どもたちは「いろいろな人のいくつもの奇跡を重ねて生まれたもの」「命が繋がっていること」などの答えを返していた。

表現が生まれる道のりを大事にする

2日目の作品づくりでは、子どもたちは自分で選んだSDGsのテーマを表現した。それぞれのテーマカラーの正方形の台紙の上に、材料となる廃材を組み立てていく。代表の望月実音子さんは「今求められているのは、一人一人が自ら問題定義をし、発想の中に解決策となる糸口を見出す力。そして、それを自分なりの手段で伝える力だと思っています。アートとは発想を表現に転換する活動です。子どもたちが自らの思考に形を与えるプロセスに寄り添いたいです」と語る。レクチャーと作品づ

アートを入り口に新しい発見、出会い、
学びを生み出すみなさんにお話をうかがいました。

レポート1 EduArt「グローバルシティズンをアートを通して育む」

レポート2 NPO法人Sharing Caring Culture「アートで多文化コミュニティを開く」

レポート3 WeTT実行委員会「weTREES TSURUMI プロジェクト」



c.

くりの中で、ときに子どもたちに語り掛け、時に静かに見守るふたり。副代表の野村麻友さんは「レクチャーではじっと静かにしていた子どもが、作品作りになるとぐっと集中してとても雄弁な作品を作り上げることがあります。逆に言葉で表現することが得意な子もいます。それぞれに、それぞれの場所で輝ける瞬間があること、それがこのプログラムの素晴らしいところだと思っています」と語った。

いろいろな個性を認め合う

幼少期からアメリカ、オランダ、香港などで暮らしアートを学んできた望月さんと日本語教師として国内外での勤務経験がある野村さん。「自分が持っている価値観だけが正解ではない」「いろいろな個性が肯定されることが自信につながる」という経験が活動の背景にはあった。ふたりは自身が子育てをする中で、変化の時代を生きる子どもたちが必要とする学びとは何なのか考えたという。そして、そのような学びの機会は子どもたちに等



d.

- a. SDGsのテーマカラーを選ぶ
- b. 作品づくりに熱中する生徒たち
- c. 窓辺に作品を並べて鑑賞会
- d. 右から、代表の望月実音子さん、副代表の野村麻友さん

しく与えられるべきという信念をもって、EduArtを設立した。1人でも多くの子どもたちに届けたいという思いから、さまざまな学校を訪れプログラムを届けるというスタイルを取っている。「一つの正解を誰かと競い合うのではなく、互いの価値観を認め合う。そんな大人になってほしい」。そんな思いを胸に、子どもたちが世界と自分を見つめる視点を育てているEduArt。SDGsを入口に、子どもたちが表現することの喜びを発見し、前を向いて未来を切り開いていけるよう、これからも活動を続けていく。

EduArt

WEB: <https://www.eduart.jp/>

SNS: www.facebook.com/EduArt.japan

www.instagram.com/eduart_japan/

www.twitter.com/EduArt_japan

NPO法人 Sharing Caring Culture

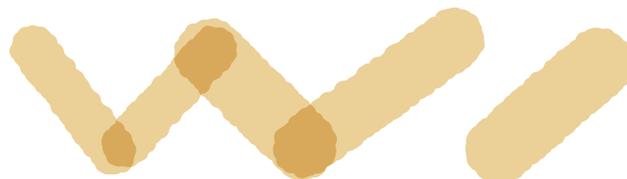
アートで多文化コミュニティを開く

言葉の壁を越える

とある休日、ショッピングモールの片隅で、世界地図に集まる人たちがいる。よく見るとどこかの国の民族衣装のような服を着ていたり、他の国の言葉話していたり、大人も子どもも楽しそうに話している。これはNPO法人Sharing Caring Culture(以下、SCC)が行う多文化共生の取り組みの一つだ。SCCは日本に住む外国人と日本人のゆるやかなコミュニティづくりの活動として、アートや料理などのワークショップイベントを開くほか、翻訳の無償サポート、暮らしの情報をやさしい日本語や英語で発信するなど実用的な支援も行っている。代表の三坂慶子さんは「外国から日本に移住してもコミュニティに属することができない人は、暮らしの基本的な情報へのアクセスが困難な状況にあり、精神的にも孤独を抱えています。私たちのイベントがコミュニティづくりの入口になればと思っています。言葉の壁を越えて、一緒に活動することで交流が生まれ、具体的なサポートにもつながりやすくなっています」と語る。

自分自身が生きている実感

この日のインストラクターはラトビア出身のラナさんとブータン出身のシェカさん。ふたりは世界旅行のストーリーとともに国を紹介し、挨拶などを子どもたちにレクチャーした。その後のワークショップではブータンで友情を表す手編みのアクセサリ「フレンドシップ・ブレスレット」と、ラトビアのクリスマス飾り「プズリス」をつくり、参加者は熱中していた。ダナさんは「子ども中心の生活で、家の外とのつながりがなく寂しい思いをしていました。でもSCCに出会って友達もでき、自分自身が生きている実感を得られたんです。私も生まれ育ったラトビアについて最初はなんにも答えられませんでした。人前で話せるようになるまで



たくさん調べて何度も練習したんですよ」とはにかんだ。SCCのアート活動は国境を越えた生活と文化の架け橋となっている。



a.



b.



c.

- a. 左から、インストラクターのブータン出身のシェカさん、ラトビア出身のダナさん、企画運営を担当したインド出身のアキラさん、代表の三坂さん、カメラを担当したカナダ出身のアンドリュースさん。
- b. ブータンの挨拶を話す様子。シェカさんはブータンのキラを羽織っている。
- c. ラトビアの場所を探す様子。ダナさんはラトビアのリエルワールデ帯を巻いている。

NPO法人 Sharing Caring Culture

WEB: <https://sharingcaringculture.org/>

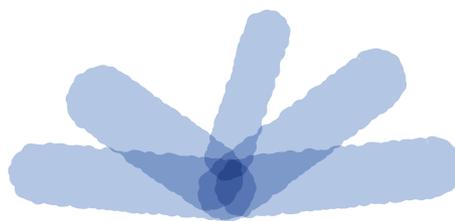
SNS: www.facebook.com/100064862225338

www.instagram.com/sharing_culture

www.twitter.com/sharing_SCC

WeTT実行委員会

weTREES TSURUMI プロジェクト



鶴見小野に笑顔を

JR鶴見線鶴見小野駅を降りると目を引くのが町中に貼ってある鮮やかなピンクの丸いシール。そこには「おつかれさま」「祭りが楽しい」「鶴見線を4両にして〜」など町の人たちによる言葉が並んでいる。読んでいるとまちの優しさやユーモアが伝わってくる。これはアートでまちづくりを行うWeTT実行委員会(以下、WeTT)による取り組みで、日本を拠点とするスイス人デザイナーユニットSO+BAによる「Connecting Dots in Tsurumi」だ。住民からはまちが明るくなったという声が寄せられた。団体の存在が知られるきっかけにもなっている。ローカルクリエイターの有村俊彦さんは「アートによるまちづくりは私たちだけでなく、まちの人たちとともに行うものです。定期的な勉強会を通してみなさんの声を聞きながらじっくりと進めています。鶴見小野の笑顔が増えると信じてがんばっています」と微笑んだ。

文化が交差するまち

活動を始めたきっかけについて象の鼻テラスアートディレクターの岡田勉つとむさんは「海外アーティストたちと鶴見小野を歩いたときに、まちの魅力にあらためて気づきました。古い商店街と新しい施設、そして多様な国のコミュニティが存在する鶴見小野。地域課題もありますが、アートの視点を持ち込むことで、面白いことが起こると感じました」と語る。WeTT代表で小野町通り共栄会会長の服部宏昭さんは「まちを盛り上げたいという一心で始めました。アートは知らないことばかりでしたが、やっていくうちに身の回りのあれもこれもアートなんだと気がつき、まちの見え方が

新しくなりました」と目を輝かせた。鶴見小野駅から徒歩10秒の位置にWeTTのアートスペースONOPOINTがある。ディレクターを務める現代美術家の原倫太郎さんは、まちに飛び出した体験型の作品をつくったり、ギャラリー空間で作品に向き合う時間をつくったりと挑戦を重ねてきた。「このまちにアートは必要かという問いは常に持つようにしています。独りよがりにならないよう、この空間で住民とのコミュニケーションを深めていきたいです」。アーティストと地域住民の眼差しが交差し、新しい鶴見小野が動きはじめています。



a.



b.

a. Connecting Dots in Tsurumi

b. 原倫太郎さんによる「アートな卓球大会」

WeTT実行委員会
 ONO POINT ART SPACE:
 神奈川県横浜市鶴見区下野谷町3丁目88 松岡ビル3
 WEB: <https://onopoint.jp/>
 MAIL: ts-info@wetrees.net
 SNS: www.instagram.com/ono.point/

アートを通して手や頭を動かしてみることで、日々の生活では気づかなかったことにあらためて立ち止まるきっかけが与えられる。たとえば同じまちのなかで、どんな国の人が、どんな思いを抱えているのだろうと考える。それはやがて世界を考えることにも通じるのかもしれない。今回の取材では、理解しきれない世界の複雑さを手の届く範囲から考え続けることへのヒントが手渡されたように感じた。

テーマ

農と生活とアート

ゲスト

原田朋子さん（虹色畑クラブ）

菊島景子さん（チャコ村）

聞き手・進行

森崎花（ヨコハマアートサイト事務局）

収録日時

2023年11月1日(水)

会場

都筑民家園

今回のテーマは「農と生活とアート」。会場は約280年前の農家の建物である都筑民家園で行われました。ゲストは生きづらさを抱える人が援農をとおして元気を取り戻す場所「虹色畑クラブ」代表の原田朋子さんと、畑と小屋と広場からなる地域の居場所不登校の子どもも集まる「チャコ村」代表の菊島景子さんを迎えました。

原田さんは精神的な不調に悩んだ過去から、畑での作業で救われた自分自身の体験を語りました。笑顔で語る様子に畑の楽しさがいきいきと伝わってきます。虹色畑クラブがアートを取り入れたのは今年から。寿町でアートワークショップと夕食を共にする場を開いている「居場所『カドベヤで過ごす火曜日』」との出合いがきっかけです。音楽や絵などを通して農作業だけでは見えなかった参加者の姿が見られて視野が広がったといいます。

菊島さんは自作の紙芝居を用いて発表をしました。チャコ村はかつて菊島さんの祖母が農作業の休憩所として使っていた小屋でした。高齢になり閉鎖していたところ、菊島さんが次女の不登校をきっかけに

小屋を開くようになります。赤ちゃんからお年寄りまで自由に集い、農作業や食事をとにもするなかで、不登校の子どもも平日の昼間に自然と溶け込める雰囲気大切に活動を続けています。

会場には都筑区で子どもから大人までそして障害のある人とともにアート活動を行っているロジウライト代表の柏崎久恵さんも参加していました。柏崎さんは活動のなかで藍を育てる場所を探してチャコ村に出会ったといいます。そこから菊島さんも一緒に本格的な藍染めや、綿を育てて糸を紡いだりしている中でチャコ村にアートが浸透していききました。子どもたちの新しい一面を見つけて胸が熱くなることも多いと柏崎さんは語ります。

ディスカッションでは、来てても来なくてもいい場所のあり方について語られ、無理に行くのではなくて、自分が行きたいと思っで行ける場所があること、ただ共にいることを大事にする視点に共通点を見出しました。終了後も参加者同士が語り合い、生活と地続きにあるアートと農の魅力を味わう時間になりました。



右から、原田朋子さん、菊島景子さん、森崎花



左: 川崎市 インクルーシブ音楽プロジェクト「いろいろなねいる JAM」
写真提供: 川崎市、撮影: Taku Watanabe
右: 情報交換と出会いの交流会「パラアート・ミーティング」

～川崎の未来を豊かに彩るつながりづくり～

寄稿: 久保田 陽子

公益財団法人川崎市文化財団 事業課の久保田陽子さんが
川崎市のパラアートの活動について語っていただきました。

いま川崎市のアートシーンは、2024年の市制100周年に向けて盛り上がっています。誰もが芸術文化に触れ、参加できる環境づくり「アート・フォー・オール」を目標に、市ではアートを介したコミュニケーション形成の取り組みがスタート。多様性や包摂性を育む視点から、障がいの有無や国籍、年齢等問わず、身近な場所ですぐ音楽コミュニケーションを体験できるインクルーシブ音楽プロジェクトも進行中です。

私が担当する川崎市文化財団「パラアート推進事業」では、障がいの有無に関わらず芸術文化に親しめる環境づくりに取り組んでいます。6年間担当してきて感じることは、「障がい」に関心を持つ方や、つながる「こと」に前向きな方が増えてきたこと。コロナの制限が解除されるからは特に「障がいのある方にも参加を呼びかけたい」という既存の市民団体や、「こんな企画をやってみたい」と新たに団体を立ち上げる当事者の方が増えました。また、パラアートの関係者をつなぐ交流会の開催をきっかけに、障害福祉施設がアーティストを講師として招くようになった事例や、団体同士でコラボした事例等も生まれています。SDGsの機運の高まりも相まって、民間企業からのお問い合わせも増え、パラアートに関する取り組みは着実に広がってきています。

長年障害福祉施設で音楽サロンを続けてきた団体の方とお話した際「コロナを境に地域の方の足が遠のいてしまった。これまで音楽の場づくりを目的にサロンを『提供』してきたが、これからはつながり維持のために地域の皆さんと『一緒につくる関係』も構築していきたい」とおっしゃっていたのが印象的でした。互いに認め合い、支え合う川崎の未来に向けて、芸術文化の力で楽しくつながり、共創する関係づくりを、パラアートの活動でも引き続き模索していきたいと考えています。



久保田 陽子

くぼた ようこ 公益財団法人川崎市文化財団 事業課

公益財団法人都城市文化振興財団(宮崎県) 事業課勤務を経て、2018年から川崎市に移り住み、現職にて「パラアート推進事業」を担当。情報サイト「ばらあーとねっと」の運営や、パラアートを中心とした芸術文化活動の中間支援を通して、多様な市民の方々と出会い、知れば知るほど面白い川崎の魅力にはまり中(画像はアーティストの方とおしゃべりしながら描いてもらった似顔絵)。

事務局うろうろ日記



ヨコハマアートサイト事務局は、今日も横浜市内の
あっちこっちへうろうろしています。



10月27日 金曜日

ひよこの会によるアート展「ひよこの会のハロウィン from Home」を観に黄金町アートブックバザールへ。〈目には見えないおばけ〉をテーマに触り心地の異なる様々な素材が使われた作品が並ぶ。作者の多くは目が見えない・見えにくい子どもたち。本屋に浮かぶおばけたちがまちを彩っていた。

11月2日 木曜日

あおば支援学校の文化祭「あおばフェスタ」でオリオリオルオルの機織りワークショップを体験。一段ずつ糸を通して間を詰めて。地道な作業を通して参加者同士が繋がっていく。参加した生徒たちもその感触を味わっていた。ほかにも生徒たちによるお店や美術作品の展示などもあり賑わっていた。



11月16日 木曜日

Little Free Library はちのじぶんこのフリーライブラリーを周遊する。家の庭先、団地の入口、お店の中などに個性的な本棚がある。これは自由に借りることができる私設図書館だ。本のジャンルはさまざまだが全て誰かの「お気に入りの本」だという。自由に持ち帰れるしお礼も愛らしい。

11月18日 土曜日

Studio oowa「YUKAI YOKAI YAKAI」へ。妖怪風の写真を撮影するワークショップだ。「妖怪のイメージって？」との問いに子どもたちからは「透けている」「飛んでいる」「たまに驚かせる」など沢山のイメージが飛び出した。写真には子どもたちの魅力が反映された妖怪たちが映し出された。



ヨコハマアートサイトとは

横浜市地域文化サポート事業。地域課題の解決にアプローチする文化芸術活動、文化芸術の持つ創造性をコミュニティやまちの活性化と結びつける活動、ヨコハマの個性ある文化芸術を市内外へ発信する活動を広く公募し、支援する事業です。

事務局・お問い合わせ

ヨコハマアートサイト事務局（認定NPO法人 STスポット横浜、横浜市にぎわいスポーツ文化局）
〒220-0004 横浜市西区北幸1-11-15 横浜STビル B1F（認定NPO法人STスポット横浜 地域連携事業部 内）
TEL:045-325-0410 FAX:045-325-0414 MAIL:office@y-artsite.org WEB:https://y-artsite.org
SNS :https://twitter.com/Y_Artsite https://www.facebook.com/yokohama.artsite

季刊ヨコハマアートサイト vol.037

発行：ヨコハマアートサイト事務局 編集：認定NPO法人 STスポット横浜 編集協力：大谷薫子 取材・テキスト：小川智紀、森崎花、田中真実
デザイン：小池佑子 撮影(表紙・レポート1)：金子愛帆 印刷・製本：共進印刷株式会社 発行日：2023年12月31日
季刊誌についてのご意見・感想もお待ちしております。